

# 青少年教育施設の家族参加型体験事業に対する 保護者の期待に関する研究

研究代表者 桜の聖母短期大学 講師 庄子 佳吾  
Shoji Keigo  
共同研究者 盛岡大学短期大学部 助教 及川 未希生  
Oikawa Mikio

## 研究の要旨

本研究では、国立青少年教育施設における家族事業の参加者を対象に、青少年教育施設に対する保護者の意識や特性の把握並びに期待している教育的効果を構造化するとともに、現代社会に即した家庭への支援の可能性について考察することを目的とした。その結果、自然や人と触れ合うことによる心身の成長、非日常の体験の時間を家族で共有すること、社会情勢に応じた体験の機会の創出といった期待を構造化することができた。これより、家族参加型体験事業には現代の家庭教育に対する包括的アプローチとしての発展性があると考えられた。

## 1. 研究の目的

昨今、子供を取り巻く環境が大きく変化しており、三間（時間・空間・仲間）の喪失により体験活動<sup>1)</sup>の場や機会が減少していると指摘されて久しい。内閣府<sup>2)</sup>の子供・若者白書では、「学校以外の公的機関や民間団体が行う自然体験活動への参加率は減少傾向にある」ことが明らかになっており、特に小学校4～6年生は2006年度から2014年度にかけて10ポイント以上低下しているなどといった結果から、体験活動の減少に対して警鐘を鳴らしている。

このような背景から、中央教育審議会<sup>3)</sup>は、今後の青少年の体験活動の推進について」の中で、青少年の「生きる力」<sup>4)</sup>を育むために「体験活動の機会を意図的・計画的に創出することが求められている」と述べており、その機会の拡充は現代社会に求められている教育課題であるといえる。同様に、第3期教育振興基本計画<sup>5)</sup>でも「子供たちが達成感や成功体験を得たり、課題に立ち向かう姿勢を身に付けたりすることができるよう、様々な体験活動の充実を図る」等に明示され、今後一層の充実が政策目標として掲げられている。

独立行政法人国立青少年教育振興機構（以下、「機構」という。）の調査結果によれば、自然体験や生活体験、文化芸術体験が豊富な子供、お手伝いを多く行っている子供は、自己肯定感が高く、自立的行動習慣や探究力が身につけている<sup>6)</sup>ことや家族の愛情・絆を基盤に、遊びに熱中するなど様々な体験をした人ほど、社会を生き抜く資質・能力が高い<sup>7)</sup>ことが明らかになっている。これは、家族とともに体験活動をすることの教育的意義を示している結果とも推察できる。

一方で、我が国における青少年の体験活動を専

門的に支援する青少年教育施設においては、これらの調査結果が示される以前よりファミリーキャンプなどの家族参加型体験事業（以下、「家族事業」という。）を展開してきた歴史がある。しかしながら、このような教育実践は数多くあるものの、研究蓄積は多くないのが現状である。家族事業に着目した研究として、福満ら<sup>8)</sup>は、青少年教育施設が実施したファミリーキャンプ参加者の参加行動に焦点を当てた調査を行い、保護者の志向が強く影響すること、施設や指導者への安心感という主体的要因、その保護者のニーズを満たす機能的要因が参加を促進させる可能性がある」と述べている。また、庄子<sup>9)10)</sup>が行った事例研究では、家族事業では子供と大人、両者による「協働学習モデル」が成立している可能性、「人（参加者の視点）」から「場（施設）」を捉えることで、家族にとっての魅力的な生活の場になりうる可能性について言及しているものの、両者ともに対象の限定性を課題として挙げている。

そこで、本研究では、国立青少年教育施設における家族事業の参加者を対象に、青少年教育施設に対する保護者の意識や特性の把握並びに期待している教育的効果を構造化するとともに、現代社会に即した家庭への支援の可能性について考察することを目的とした。張本<sup>11)</sup>は子供が自然体験活動に参加するに当たり、保護者が強い影響力を持つこと、保護者の自然体験に対する意識を明らかにすることは野外教育や自然体験活動を運営する上で意義があると示唆していることから、これらを明らかにすることは、家庭における体験活動ひいては青少年期の体験活動の充実に寄与するものとする。

## 2. 方法

### 2.1 対象

本研究の対象は、2021年6月～10月に機構が運営する国立青少年教育施設において実施された家族事業27事業中、回答があった24事業（回収率88.9%）、参加家族272組より研究同意及び回答の得られた参加者（保護者）266名（回収率97.7%）を分析対象とした。データ処理については回答に不備のある4名を分析対象から除いた262名（有効回答率96.3%）を有効回答者とした。なお、回答は参加家族1組につき1名とした。

### 2.2 調査方法及び内容

調査方法は質問紙調査とし、家族事業を実施する国立青少年教育施設を介して、アンケートの配布、回収を行った。調査内容は、対象者の基本属性の他、①体験活動の実態を把握するため、「早寝早起き朝ごはん」全国協議会<sup>12)</sup>が実施した『「早寝早起き朝ごはん」の効果に関する調査研究』（以下、「早寝調査」という。）より、小学生の頃の体験（自然体験、動植物とのかかわり、友達との遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い）に関する選択項目（30項目）、②子供の体験活動、しつけに対する意識を把握するため、機構<sup>13)</sup>が実施した「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元調査）」（以下、「機構調査」という。）より、子供の体験活動に対する意識（7項目のうち、4項目）と早寝調査より子供へのしつけ（15項目）に関する選択項目、③青少年教育施設の家族事業に対する意識を調査するため、家族事業への参加状況に関する選択項目（4項目）及び参加動機、満足・不満足、事業後の変化に関する自由記述項目（3項目）、事業への継続参加希望、友人・知人への事業情報の提供に関する選択項目（2項目）、④家庭の経済状況との関連を調査するため、子供の学校以外の教育費、世帯収入、家庭の経済状況への印象に関する選択項目（3項目）から構成した。

### 2.3 分析方法

#### 2.3.1 体験活動の実態及び子供の体験活動、しつけに対する意識

体験活動の実態（自然体験、動植物とのかかわり、友達との遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い）に関する30項目は回答を「何でもある」を1点、「少しある」を2点、「ほとんどない」を3点と得点化、割合を算出し、本研究の対象者と早寝調査の対象者のうち、子供を持つ保護者とその割合に差が見られるか分析を行った。

子供の体験活動に対する意識に関する4項目は、回答を「とても思う」を1点、「少し思う」を2点、「あまり思わない」を3点、「思わない」を4点と得点化、割合を算出し、本研究の対象者と機構調査の対象者でその割合に差が見られるか分

析を行った。

子供へのしつけに関する15項目は回答を「熱心してきた」を1点、「まあしてきた」を2点、「あまりしてこなかった」を3点、「ほとんどしてこなかった」を4点と得点化、割合を算出し、本研究の対象者と早寝調査の対象者でその割合に差が見られるか分析を行った。

なお、子供の体験活動、しつけに対する意識に関しては、機構調査、早寝調査ともに小学生以上の子供を持つ保護者が対象であるため、本研究の対象者も同条件の213名を抽出、比較対象とした。

全ての統計処理には、IBM SPSS Statistics 26を使用した。

#### 2.3.2 青少年教育施設の家族事業に対する意識

家族事業への参加動機、満足・不満足、事業後の変化に関する自由記述項目に記載されたテキストデータを使用し、計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析には、樋口<sup>14)</sup>が開発したKH Coder Version 3. Beta. 04（以下、「KH Coder」という。）を用いた。

KH Coderでは、テキストデータを単語や句に分節し、形態素解析<sup>15)</sup>を行った上で、出現数や単語間の相関関係を抽出するために、言及頻度分析を行った。分析内容は以下のとおりである。

- ①言及頻度分析では、まず自由記述の各項目で得られた語のうち、上位50位の頻出する語（以下、「頻出語」という。）を抽出・整理しその出現傾向を検討した。
- ②抽出された頻出語について、どのような特徴が見られるかを探索・類型化するため、階層的クラスタ分析を行った。
- ③抽出された頻出語間の文脈から家族事業に対する意識を統計的に分析するため、共起ネットワーク分析を行った。

以上の分析のうち、②及び③においてはKH CoderのKWICコンコーダンス<sup>16)</sup>機能（以下、「コンコーダンス」という。）を用いて、頻出語がどのような文脈で出現したか、それらの語の前後にどのような単語が共起しているかについても検討した。また、分析過程では、誤字脱字及び「子供」「子ども」といった表記ゆれについては、研究者間で確認、判断し、修正することでデータ解釈の信頼性と妥当性を確保した。なお、本報告では、家族事業に対する保護者の期待を中心に取り扱うため、参加動機を中心にした分析結果を示す。

### 2.4 倫理的配慮

調査票に、研究目的と内容、研究協力は自由意志によるものであり、不参加の場合も不利益を受けることはなく、回答したくない質問に対しては回答しなくてもよいことを明記した。また、個人情報保護の厳守、結果の公表については学術研究

の目的でのみ使用されること、調査票は研究終了後、適切な方法で廃棄処理することを口頭説明及び調査票へ明記し、調査への回答及び用紙の提出をもって研究協力の同意を得るものとした。なお、本研究に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業・団体等はない。

### 3. 結果

#### 3.1 基本属性

本研究の対象の種別、年代、居住地域、家族構成は以下に示したとおりである(図1、2、3、4)。対象は母親(57.6%)が最も多く、次いで父親が(40.8%)であった。対象の年代は40代(50.8%)が最も多く、次いで30代(40.5%)であった。家族構成としては二世帯世帯(73.7%)が最も多く、次いで三世帯世帯(24.0%)であった。

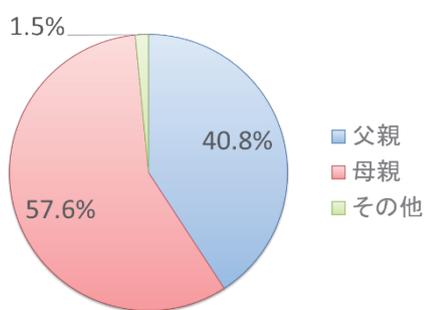


図1 対象の種別 (N=262)

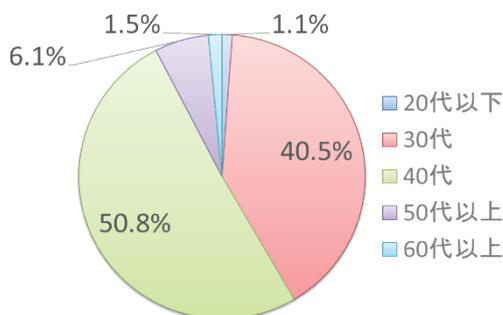


図2 対象の年代 (N=262)

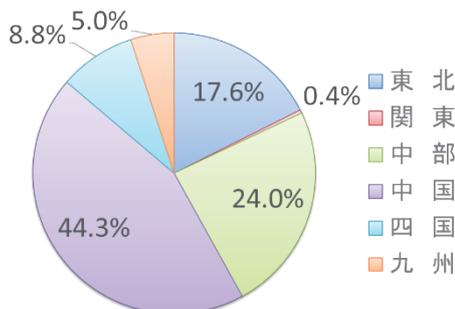


図3 対象の居住地域 (N=262)

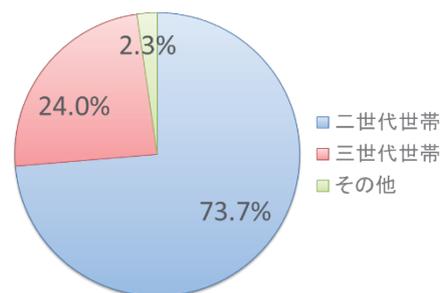


図4 対象の家族構成 (N=262)

#### 3.2 体験活動の実態

小学生の頃の体験(自然体験、動植物とのかかわり、友達との遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い)の実態と早寝調査との比較結果は以下に示したとおりである(表1、図5、6、7、8、9、10)。早寝調査との比較では、全項目において本研究の対象の方が「何でもある」と回答した割合が高くなっていた。

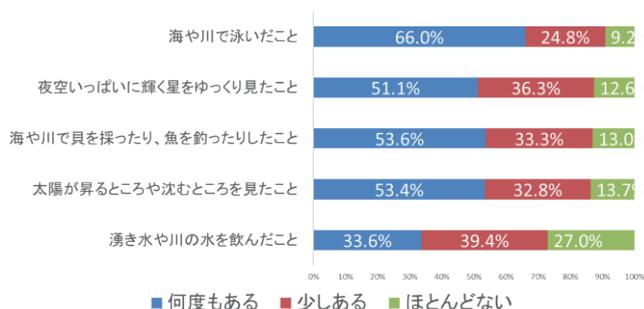


図5 子供の頃の自然体験 (N=262)

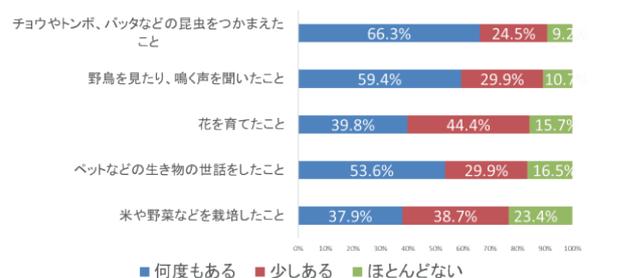


図6 子供の頃の動植物とのかかわり (N=262)

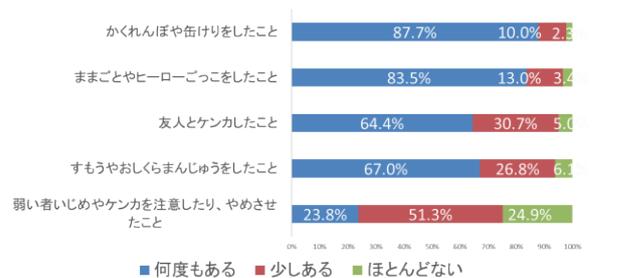


図7 子供の頃の友達との遊び (N=262)

表1 体験活動の実態と比較結果

区分	項目	調査種別 本研究 (n=262) 早寝調査 (n=2,128)	回答別(%)		
			何でもある	少しある	ほとんどない
【自然体験】	海や川で泳いだこと	本研究	66.0%	24.8%	9.2%
		早寝調査	34.3%	38.5%	27.3%
	夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと	本研究	51.1%	36.3%	12.6%
		早寝調査	34.1%	39.3%	26.6%
	海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと	本研究	53.6%	33.3%	13.0%
		早寝調査	28.8%	35.2%	36.0%
	太陽が昇るところや沈むところを見たこと	本研究	53.4%	32.8%	13.7%
		早寝調査	33.7%	39.1%	27.1%
	湧き水や川の水を飲んだこと	本研究	33.6%	39.4%	27.0%
		早寝調査	20.8%	31.4%	47.7%
【動植物との かかわり】	チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと	本研究	66.3%	24.5%	9.2%
		早寝調査	42.0%	35.0%	23.1%
	野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと	本研究	59.4%	29.9%	10.7%
		早寝調査	29.2%	39.1%	31.7%
	花を育てたこと	本研究	39.8%	44.4%	15.7%
		早寝調査	21.8%	41.5%	36.7%
	ペットなどの生き物の世話をしたこと	本研究	53.6%	29.9%	16.5%
		早寝調査	34.9%	37.4%	27.7%
	米や野菜などを栽培したこと	本研究	37.9%	38.7%	23.4%
		早寝調査	18.5%	29.1%	52.4%
【友だちとの 遊び】	かくれんぼや缶詰をしたこと	本研究	87.7%	10.0%	2.3%
		早寝調査	60.7%	29.9%	9.4%
	ままごとやヒーローごっこをしたこと	本研究	83.5%	13.0%	3.4%
		早寝調査	49.2%	35.1%	15.7%
	友人とケンカしたこと	本研究	64.4%	30.7%	5.0%
		早寝調査	39.7%	46.3%	14.0%
	すもうやおしくらまんじゅうをしたこと	本研究	67.0%	26.8%	6.1%
		早寝調査	39.7%	39.2%	21.1%
	弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたこと	本研究	23.8%	51.3%	24.9%
		早寝調査	12.8%	38.4%	48.8%
【地域活動】	祭りに参加したこと	本研究	78.9%	17.6%	3.4%
		早寝調査	44.3%	42.8%	12.9%
	地域清掃に参加したこと	本研究	53.6%	35.2%	11.1%
		早寝調査	23.5%	40.7%	35.7%
	近所の小さい子どもと遊んであげたこと	本研究	50.6%	35.2%	14.2%
		早寝調査	30.1%	42.6%	27.3%
	近所の人に叱られたこと	本研究	37.7%	43.5%	18.8%
		早寝調査	17.5%	43.4%	39.1%
	バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずった	本研究	27.2%	47.1%	25.7%
		早寝調査	24.2%	43.2%	32.6%
【家族行事】	家族の誕生日を祝ったこと	本研究	86.6%	10.7%	2.7%
		早寝調査	55.5%	33.0%	11.6%
	お墓参りをしたこと	本研究	86.2%	10.3%	3.4%
		早寝調査	57.7%	30.8%	11.6%
	家族で家の大掃除をしたこと	本研究	65.5%	28.7%	5.7%
		早寝調査	42.5%	40.3%	17.2%
	親戚、友人の家にひとりで宿泊したこと	本研究	45.2%	30.7%	24.1%
		早寝調査	29.8%	37.0%	33.2%
	家族の病気の看病をしたこと	本研究	36.4%	36.0%	27.6%
		早寝調査	21.9%	36.9%	41.2%
【家事手伝い】	家の中の掃除や整頓を手伝ったこと	本研究	62.8%	33.0%	4.2%
		早寝調査	45.2%	41.5%	13.3%
	ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと	本研究	68.2%	24.1%	7.7%
		早寝調査	42.2%	36.9%	20.9%
	食器をそろえたり、片付けたりしたこと	本研究	57.1%	33.3%	9.2%
		早寝調査	45.1%	38.2%	16.7%
	洗濯をしたり干したりしたこと	本研究	51.3%	28.4%	20.3%
		早寝調査	36.9%	33.7%	29.4%
	ゴミ袋を出したり、捨てたこと	本研究	49.0%	27.2%	23.8%
		早寝調査	38.5%	33.3%	28.1%

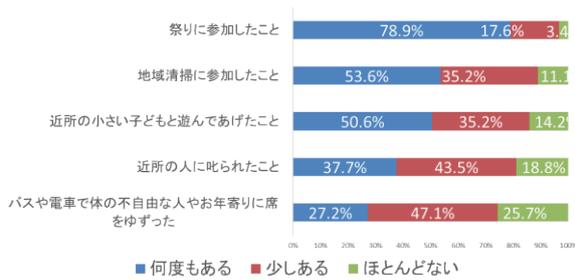


図8 子供の頃の地域活動 (N=262)

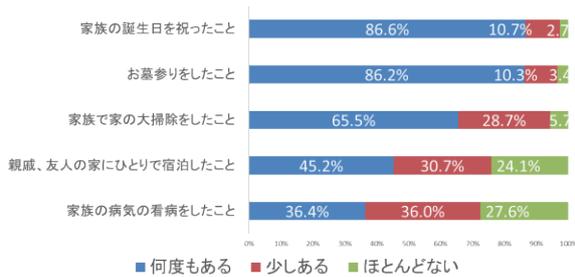


図9 子供の頃の家族行事 (N=262)

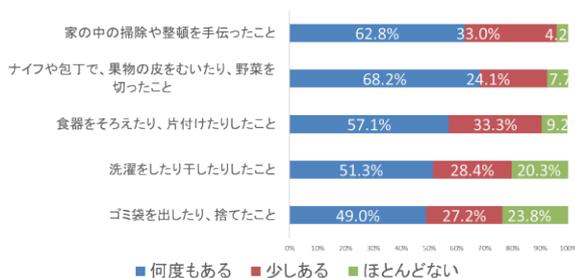


図10 子供の頃の家事手伝い (N=262)

### 3.3 子供の体験活動、しつけに対する意識

子供の体験活動に対する意識と機構調査との比較結果は以下に示したとおりである(表2、図11)。機構調査との比較では、本研究の対象者の方が「現在の子どもたちは、自分が子どもの頃と比べて、体験活動の機会が少なくなっている」の項目で「とても思う」と回答した割合が、「学校の授業や行事以外では、子どもたちが体験活動ができる機会が十分にある」「学校の授業や行事では、子どもたちが体験活動ができる機会が十分にある」「自分の子どもには、今は体験活動よりも勉強を優先させたい」の項目で「思わない」と回答した割合が高くなっていった。

答した割合が高くなっていった。

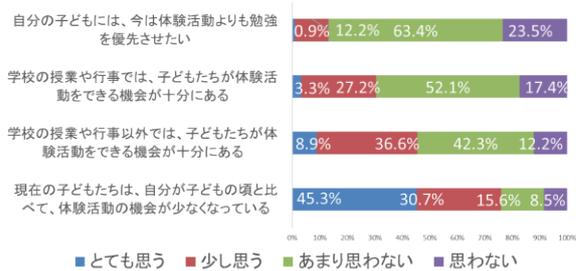


図11 体験活動に対する意識 (N=213)

また、子供へのしつけと早寝調査との比較結果は以下に示したとおりである(表3、図12)。早寝調査との比較では、本研究の対象者の方が「自分のことは自分ですること」の項目を除き、「熱心にしてきた」「まあしてきた」と回答した割合が高くなっていった。「自分のことは自分ですること」の項目に関しては「熱心にしてきた」「まあしてきた」と回答した割合が早寝調査より低かった(「熱心にしてきた」: 本研究 22.5%、早寝調査 22.8%、「まあしてきた」: 本研究 54.9%、早寝調査 58.3%)。

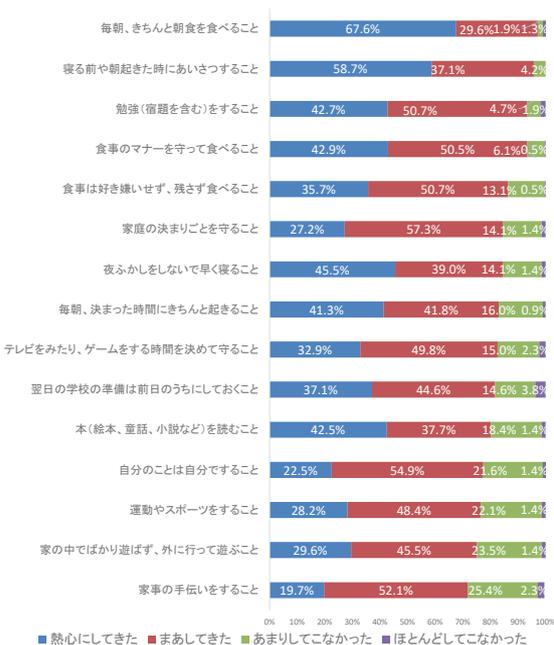


図12 子供へのしつけ (N=213)

表2 体験活動に対する意識と比較結果

項目	調査種別	回答別(%)			
		とても思う	少し思う	あまり思わない	思わない
現在の子どもたちは、自分が子どもの頃と比べて、体験活動の機会が少なくなっている	本研究	45.3%	30.7%	15.6%	8.5%
	機構調査	37.7%	38.7%	28.3%	4.5%
学校の授業や行事以外では、子どもたちが体験活動ができる機会が十分にある	本研究	8.9%	36.6%	42.3%	12.2%
	機構調査	7.6%	38.4%	45.3%	7.7%
学校の授業や行事では、子どもたちが体験活動ができる機会が十分にある	本研究	3.3%	27.2%	52.1%	17.4%
	機構調査	10.7%	51.3%	32.9%	4.6%
自分の子どもには、今は体験活動よりも勉強を優先させたい	本研究	0.9%	12.2%	63.4%	23.5%
	機構調査	2.1%	20.2%	64.4%	12.5%

表3 子供へのしつけと比較結果

項目	調査種別	回答別(%)			
		熱心にしてきた	まあしてきた	あまりしてこなかった	ほとんどしてこなかった
毎朝、きちんと朝食を食べること	本研究	67.6%	29.6%	1.9%	1.3%
	早寝調査	40.5%	46.5%	8.3%	4.7%
寝る前や朝起きた時にあいさつすること	本研究	58.7%	37.1%	4.2%	0.0%
	早寝調査	34.3%	46.2%	15.0%	4.5%
勉強(宿題を含む)をすること	本研究	42.7%	50.7%	4.7%	1.9%
	早寝調査	24.5%	53.9%	17.1%	4.5%
食事のマナーを守って食べる	本研究	42.9%	50.5%	6.1%	0.5%
	早寝調査	27.1%	59.1%	11.5%	2.2%
食事は好き嫌いせず、残さず食べる	本研究	35.7%	50.7%	13.1%	0.5%
	早寝調査	25.9%	55.7%	14.7%	3.7%
夜ふかしをしないで早く寝ること	本研究	45.5%	39.0%	14.1%	1.4%
	早寝調査	19.7%	51.6%	23.2%	5.5%
家庭の決まりごとを守ること	本研究	27.2%	57.3%	14.1%	1.4%
	早寝調査	20.1%	58.0%	18.6%	3.3%
毎朝、決まった時間にきちんと起きること	本研究	41.3%	41.8%	16.0%	0.9%
	早寝調査	25.4%	55.8%	15.3%	3.6%
テレビをみたり、ゲームをする時間を決めて守ること	本研究	32.9%	49.8%	15.0%	2.3%
	早寝調査	14.5%	47.7%	30.5%	7.3%
翌日の学校の準備は前日のうちにしておく	本研究	37.1%	44.6%	14.6%	3.8%
	早寝調査	21.9%	52.0%	21.5%	4.6%
本(絵本、童話、小説など)を読むこと	本研究	42.5%	37.7%	18.4%	1.4%
	早寝調査	16.8%	43.1%	32.4%	7.7%
自分のことは自分ですること	本研究	22.5%	54.9%	21.6%	1.4%
	早寝調査	22.8%	58.3%	15.6%	3.3%
運動やスポーツをすること	本研究	28.2%	48.4%	22.1%	1.4%
	早寝調査	18.4%	41.0%	33.7%	7.0%
家の中でばかり遊ばず、外に行って遊ぶこと	本研究	29.6%	45.5%	23.5%	1.4%
	早寝調査	15.3%	48.9%	29.6%	6.1%
家事の手伝いをする	本研究	19.7%	52.1%	25.4%	2.3%
	早寝調査	12.6%	45.3%	35.6%	6.5%

3.4 青少年教育施設の家族事業に対する意識

3.4.1 家族事業への参加状況

これまでの家族事業への参加状況は以下に示したとおりである(図13,14,15)。初参加48.8%、参加経験があるが51.2%であり、いずれかへの偏りは見られなかった。参加経験がある対象(N=133)の参加回数の範囲は1~30回であり、平均4.2回(標準偏差4.4)であった。参加人数の範囲は2~6人であり、平均3.2人(標準偏差0.9)であった。

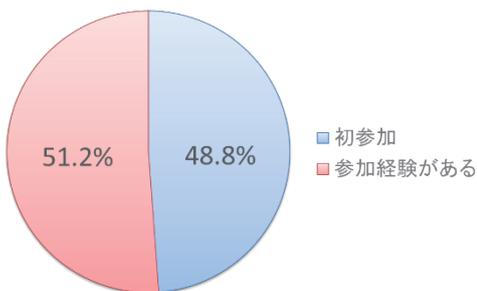


図13 家族の参加経験 (N=262)

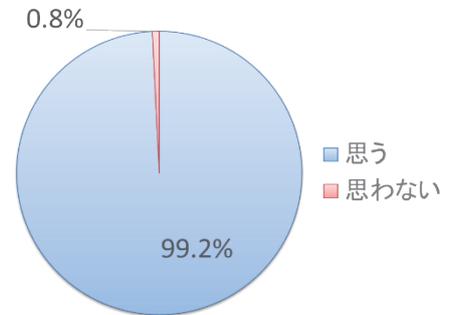


図14 家族事業への継続参加希望 (N=262)

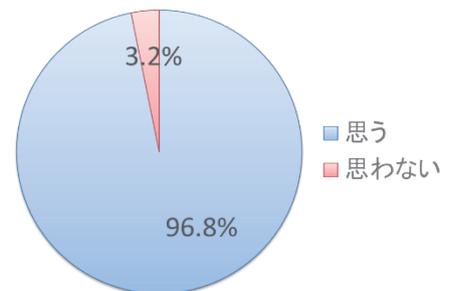


図15 友人・知人への事業情報の提供 (N=253)

### 3.4.2 家族事業への参加動機

#### (1) 頻出語と出現傾向

家族事業への参加動機に対しての記述は、599文が抽出され、総抽出語数は5,719語であった。また、この中から語の重複などを整理した結果、696語が抽出された。さらに、助詞や助動詞といったどの文にも出現する語を除いた結果、分析対象として2,144語、異なり語数543語が抽出された。頻出語（上位50位）を抽出した結果は以下に示したとおりである（表4）。30以上の出現回数を持つ単語は6語見られた。その内訳は、「子供」（131回）、「体験」（98回）、「参加」（70回）、「思う」（70回）、「自然」（41回）、「家族」（30回）であった。よって、参加動機については、「子供」を中心（起点）とした視点から記載されており、事業に「参加」し、「体験」することへの「思い（期待）」との関係性を確認することができた。

また、頻出語（上位50位）全体で見ると、「ミニ四駆」（17回）「星」（14回）「カヌー」（6回）といった特定の体験を示す語も確認された。

表4 家族事業への参加動機の頻出語（上位50位）

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子供	131	13	コロナ	15
2	体験	98	13	親子	15
3	参加	70	16	希望	14
3	思う	70	16	見る	14
5	自然	41	16	言う	14
6	家族	30	16	子	14
7	機会	21	16	自分	14
7	興味	21	16	星	14
9	ミニ四駆	17	22	楽しい	12
9	活動	17	23	一緒	11
9	好き	17	23	交流	11
12	いろいろ	16	23	行く	11
12	持つ	16	23	時間	11
23	内容	11	36	初めて	8
28	経験	10	36	他	8
28	親	10	36	友達	8
30	ふだん	9	36	遊ぶ	8
30	イベント	9	44	人	7
30	過ごす	9	45	カヌー	6
30	楽しむ	9	45	家	6
30	宿泊	9	45	考える	6
30	知る	9	45	行う	6
36	キャンプ	8	45	今回	6
36	学校	8	45	成長	6
36	作る	8	45	遊び	6
36	思い出	8			

#### (2) 階層的クラスター分析

次に抽出された頻出語（上位50位）について、階層的クラスター分析を行った（図16）。クラスター分析とは、テキストデータ全体において、似ている語をまとめる、つまりクラスターを形成し

ていく分析方法である。各抽出語や出現パターンの類似性から、テキストデータの特徴を探索・類型化することができる。

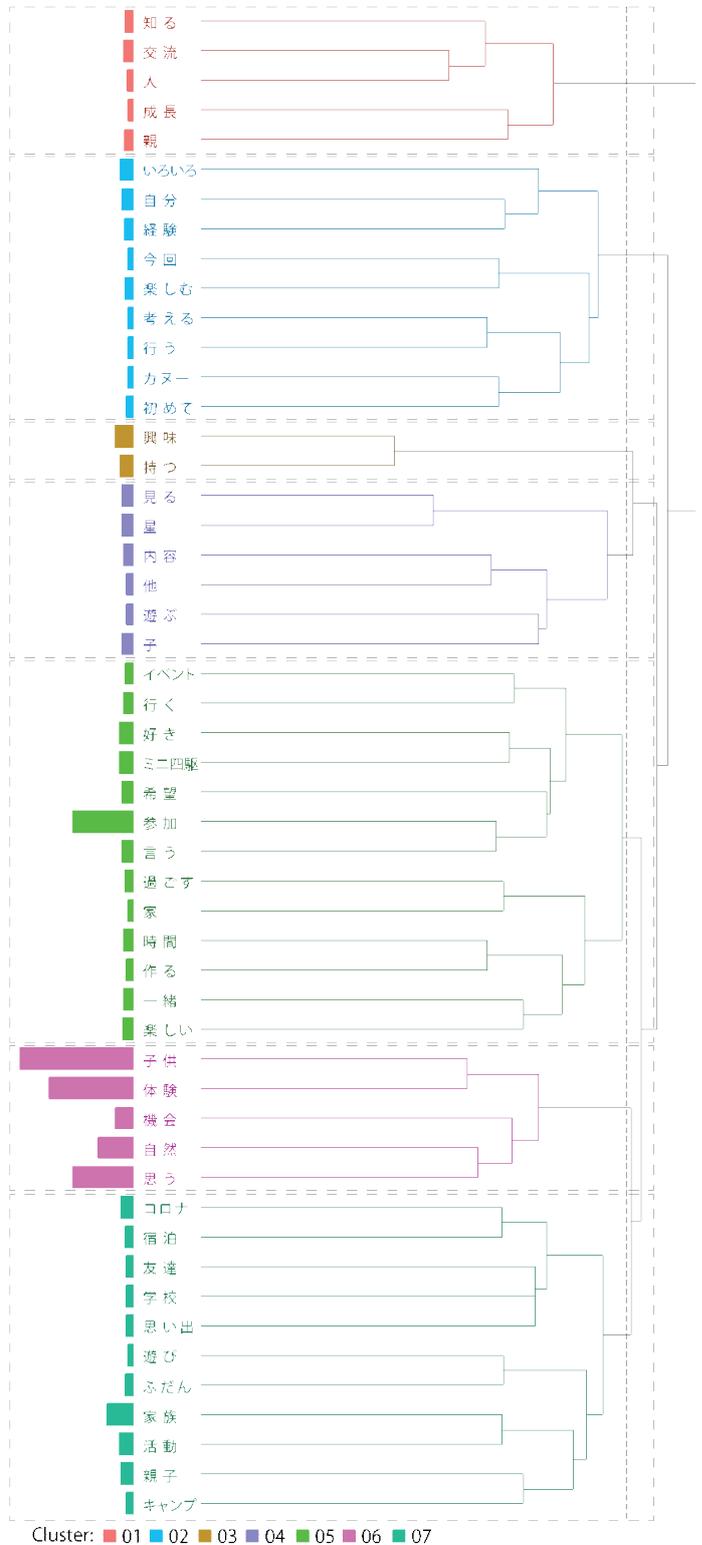


図16 家族事業への参加動機の階層的クラスター

本研究では、クラスター分析の結合方法には ward 法、類似性の指標には Jaccard 係数<sup>17)</sup>を用いた。また、併合水準の値の段階並びにその後の解釈を考慮し、視覚的に構造化しやすいクラスター数として7を設定した。分析の結果はデンドログラム(樹状図)として構造化されるが、本研究では、視認性を高めるためにクラスター単位で描画するとともに、クラスターを囲む点線を筆者が追記した。

クラスターは7つに分割されており、最大のクラスターは13の単語が結合されたクラスター5であった。クラスター1~4は、多様な体験による成長、人との交流に関する記述が見られた。頻出順では、クラスター1で、交流(11回)、親(10回)、知る(9回)、人(7回)、成長(6回)、クラスター2で、いろいろ(16回)、自分(14回)、経験(10回)、楽しむ(9回)、初めて(8回)、クラスター3で、興味(21回)、持つ(16回)、クラスター4で、見る(14回)、星(14回)、子(14回)、内容(11回)、他(8回)などが抽出された。コンコードダンスを用いて分析した結果、「初めて顔を合わせる大人、子供たちと協力して、いろいろなことにチャレンジしてもらいたかった」「自然と家族以外の人と交わることで、子供も親も成長できると思った」「兄弟がいないので参加型プログラムで同年代の子供と交流させたい(自分の家庭だけではできない)」(以下、下線は語の共起関係をもとにした筆者による追記である。)などの文脈で出現していた。

クラスター5は、保護者の趣向、子供の希望、家族で過ごす時間といった参加の根源となる要素に関する記述が見られた。頻出順では、参加(70回)、好き(17回)、ミニ四駆(17回)、希望(14回)、言う(14回)などが抽出された。コンコードダンスを用いて分析した結果、「家族揃って旅行に行くことがなく、目的のある自然体験ならばよい体験、よい思い出になると思い参加しました」「旅行が好きで、いろんなところに三人で行くが、キャンプは三人では不安がありチャレンジできずにいたところ、この応募を見て「これだ」と思い参加させていただきました」「子供と一緒にふだんできない体験をして、楽しく時間を過ごしたかった」などの文脈で出現していた。

クラスター6~7は、体験活動の機会減少や子供を取り巻く環境の変化に対する意識に関する記述が見られた。頻出順では、クラスター6は、子供(131回)、体験(98回)、思う(70回)、自然(41回)、機会(21回)、クラスター7は、家族(30回)、活動(17回)、コロナ(15回)、親子(15回)、宿泊(9回)などが抽出された。コンコードダンスを用いて分析した結果、「子供の体験のため、こ

ちらが機会を作らないと自然の中で活動することができない」「子供から参加してみたいと言われ、コロナ禍で泊まったり、出かけたりする機会がなかったので、よい機会だと思い参加しました」「コロナで子供の学校の行事の宿泊を行うものが中止され、宿泊での体験機会がほぼない」などの文脈で出現していた。

### (3) 共起ネットワーク分析

次に抽出された頻出語(上位50位)について、共起ネットワーク分析を行った(図17)。共起ネットワーク分析とは、単語が共通に出現する関係(共起関係)を円と線で結んだネットワークとして描画し、視覚的に構造化する分析方法である。KH Coderにおける共起ネットワーク分析では「比較的強くお互いに結びついている部分を自動的に検出してグループ分けを行い、その結果を色分けによって示す『サブグラフ検出』<sup>18)</sup>がある。本研究では、各要素間の関連性を確認するために、「サブグラフ検出・modularity」を選択し、家族事業への参加動機を可視化した。分析の結果、共起ネットワークは8つのサブグラフに分かれた。その際、サブグラフを囲む点線は視認性向上のために筆者が追記したものである。なお、強い共起関係ほど濃い線、出現頻度の多い単語ほど大きい円で描画されており、同じサブグラフに含まれる語は実線で結ばれ、互いに異なるサブグラフに含まれる語は破線で結ばれている。また、本研究では、集計単位を「セル」としているため、「文」や「段落」を集計単位とするよりも、Jaccard 係数が低くなる傾向がある。そこで、共起関連の強弱のみを検討するために、描画した際に視認性の高い係数として0.1と設定した。よって、この図には出現頻度が多くともJaccard 係数が0.1未満の語は表示していない。なお、図中の語や円同士配置だけでは共起関係は存在しない。

サブグラフを個別に見た結果、サブグラフ①(以下、丸囲み数字はサブグラフの番号01~08を表す。)では、「子供」を中心に「体験」「参加」が共起していた。「体験」からは「いろいろ」「自然—思う—家族—活動」と、「参加」からは「希望」「言う—友達」が結びついていた。②では、「時間」を中心に「作る」「過ごす—楽しい—家」「ふだん—遊び」「一緒に」が結びついていた。③では、「見る—星—今回—楽しむ」が結びついていた。④では、「人」を中心に「交流—自分—経験」「成長—親子」「親」「知る」が結びついていた。⑤では、「宿泊」を中心に「コロナ」「行く—イベント」「他—子—遊ぶ」が結びついていた。⑥では「興味」を中心に「持つ」「内容」「ミニ四駆—好き」が結びついていた。⑦では、「学校—行こう—考える」が結びついていた。⑧では、「初めて—カヌ



る家庭ではないと思う」（「経済的にゆとりがある家庭ではないと思う」+「どちらかといえば経済的にゆとりがある家庭ではないと思う」）と回答した割合は36.7%であった。

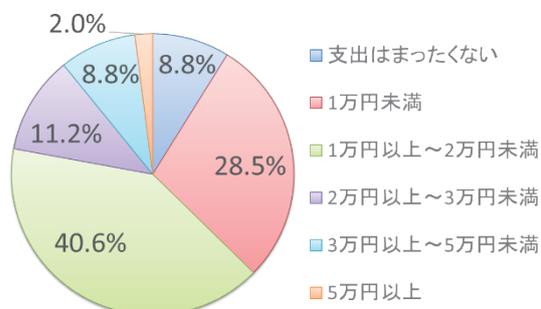


図18 子供の学校以外の1か月あたりの教育費 (N=249)

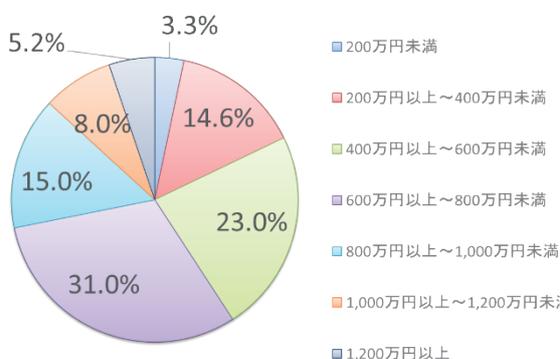


図19 家族全体の世帯収入 (N=213)

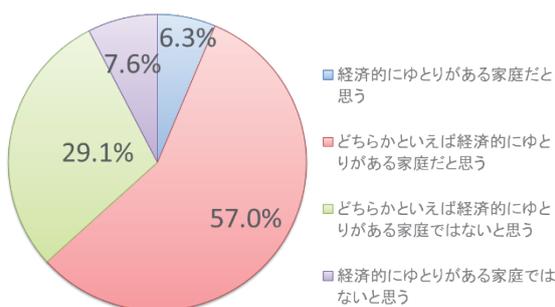


図20 家庭の経済状況についての印象 (N=237)

## 4. 考察

### 4.1 体験活動の実態

本研究における対象の体験活動の実態の結果を見ると、全項目において早寝調査よりも「何度もある」と回答した割合が高くなっていた。特に、「祭りに参加したこと」「ままごとやヒーローごっこをしたこと」「海や川で泳いだこと」「家族の誕生日を祝ったこと」「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」「地域清掃に参加したこと」

の6項目では、「何度もある」と回答した割合に30%以上の差が見られた。この他、20%以上30%未満の差があった項目が10項目、10%以上20%未満の差があった項目が13項目見られた。これより家族事業の参加者は子供の頃に比較的、豊富な体験をしている可能性が示唆された。

### 4.2 子供の体験活動、しつけに対する意識

子供の体験活動に対する意識については、機構調査と比較して、高い問題意識を持っている傾向が読み取れた。特に、「学校の授業や行事では、子どもたちが体験活動ができる機会が十分にある」では「思わない」（「思わない」+「あまり思わない」）と回答した割合に32.0%の差が見られたことから、体験活動の機会を意図的に創出する必要性を強く感じていると考えられた。

さらに、子供へのしつけについては、「自分のことは自分ですること」の項目を除き、早寝調査よりも「熱心にしてきた」と回答した割合が高くなっていた。特に、「テレビをみたり、ゲームをする時間を決めて守ること」「本（絵本、童話、小説など）を読むこと」の2項目では、「熱心にしてきた」（「熱心にしてきた」+「まあしてきた」）と回答した割合に20%以上の差が見られた。この他、10%以上20%未満の差があった項目が7項目見られた。これより子供へのしつけも比較的、多く行っていることが示唆された。

以上の結果からは、機構調査<sup>19)</sup>にて示された「保護者の自然体験が豊富なほど、子供は生活体験、自然体験、お手伝いの体験が豊富になる」「保護者による子供へのしつけが多いほど、子供は生活体験、自然体験、お手伝いの体験が豊富になる傾向」を支持する内容であると考えられる。よって、家族事業に参加している保護者は、自身の実体験を好意的に捉えており、それを子供にも体験させてあげたいという気持ちから参加しているということが推察された。

### 4.3 青少年教育施設の家族事業に対する意識

#### 4.3.1 家族事業への参加状況

家族事業への継続参加希望及び友人・知人への事業情報の提供については、いずれも90%を超えることから概ね満足度は高く、次回参加や友人・知人を誘っての参加に対する意欲が高いことが推察される。従来、消費者は他の消費者の口コミを参照して購買意思決定を行うこと<sup>20)</sup>は、既知の事実ではあるが、これを青少年教育施設に当てはめて考えれば、参加者のクチコミを利用したバズ・マーケティング（Buzz Marketing）<sup>21)</sup>を行うことが効果的に作用するとも考えられる。

#### 4.3.2 家族事業への参加動機

家族事業への参加動機の計量テキスト分析の

結果からは、階層的クラスター分析により 7 つのクラスターが形成された。クラスター5の保護者の趣向、子供の希望、家族で過ごす時間といった参加の根源となる要素を端緒として、クラスター1~4の多様な体験による成長、人との交流という期待、クラスター6~7の体験活動の機会減少や子供を取り巻く環境の変化に対する問題意識につながると考えられる。これらの結果は、共起ネットワーク分析においても同様であり、サブグラフ①にて子供や家族にとっての体験活動の重要性を示していた。その理由として、④にて自然や人と触れ合う体験を通じた学びと成長が家族事業への期待として示されていると考えられる。さらに、②、⑦では、体験活動を通して家族と過ごすこと、非日常の中で自ら考え行動することといった時間を捉えているといえる。③、⑥、⑧では、子供や家族が興味・関心を示す特徴的な活動や初めての体験プログラムに対する具体的な希望を指しているものであり、これらも参加にあたって期待される要素と考えられる。一方、⑤はコロナ禍における子供の遊び、交流、体験の機会の減少という昨今の社会情勢を強く反映しているものであった。特に学校行事をはじめ、様々な体験の機会が減少していることによる子供への影響を危惧していることが分かった。

以上より、家族事業への期待として、自然や人と触れ合うことによる心身の成長、非日常的な体験の時間を家族で共有すること、子供の興味・関心、社会情勢に応じた体験の機会を創出したいという保護者の「思い」があると考えられた。これは古川<sup>22)</sup>が提起する、今まで持っていなかった「モノ」が手に入ること（物質的な豊かさ）から今まで経験してなかった「コト」を経験する（心の豊かさ）を手に入れるための方向性（手段）として期待されていると考えられる。また、国立成育医療研究センター<sup>23)</sup>が示したコロナ禍における子供の心身の健康の低下に対する改善が期待されていることも見出せる。

#### 4.4 家庭の経済状況

子供の学校以外の教育費について、文部科学省の子供の学習費調査<sup>24)</sup>では公立小学校の学校外活動費は1か月あたり約1万8千円であることから、本研究の結果は概ね平均的な金額支出であると考えられる。世帯収入についても同様に、厚生労働省の国民生活基礎調査<sup>25)</sup>では「児童のいる世帯」の平均所得金額は745万9千円であることから、本研究の結果は概ね平均的な世帯収入であると考えられる。これらはいずれも単純な比較は困難であるが、家庭の経済状況への印象において、経済的にゆとりがある家庭だと思ふ（「経済的にゆ

とりがある家庭だと思ふ」+「どちらかといえば経済的にゆとりがある家庭だと思ふ」と回答した割合が63.3%だったこと、機構調査<sup>26)</sup>にて示された「世帯年収が大きくなるほど子供の自然体験は多くなる傾向」があることも踏まえれば、一定水準以上の経済状況にあると考えられる。

#### 5. まとめ

本研究では、国立青少年教育施設における家族事業の参加者を対象に、青少年教育施設に対する保護者の意識や特性の把握並びに期待している教育的効果を構造化するとともに、現代社会に即した家庭への支援の可能性について考察することを目的とし、調査を行った。その結果により得られた知見は次のとおりである。

- ① 家族事業に参加する保護者は子供の頃に豊富な体験をしていること、子供の体験活動に対する問題意識があり、しつこくよく行っていることが示唆された。
- ② 家族事業に対する満足度は高く、自然や人と触れ合うことによる心身の成長、非日常的な体験の時間を家族で共有すること、子供の興味・関心、社会情勢に応じた体験の機会の創出といった期待を構造化することができた。
- ③ 家族事業の参加者は一定水準以上の経済状況である可能性がある。

以上が、家族事業の参加者の特性の一端を明らかにし、期待している教育的効果の構造化を試みた結果である。これらは親が子どもと遊ぶことの重要性を言及した河合<sup>27)</sup>の論説など家族での体験活動の教育的意義を支持する結果であるといえる。さらに、期待の文脈では、脳科学の分野から自然体験活動による子供の知的好奇心の高まり、感受性の育ちといった有用性を示した瀧<sup>28)</sup>の論説や自然がもたらすQOL（生活の質）の向上を明らかにした宮崎<sup>29)</sup>の研究結果とも関連するものであった。したがって、家族事業には現代の家庭教育に対する包括的アプローチとしての発展性があると考えられる。

また、今後の展開として、本研究で明らかになった家族事業参加者の特性を基に、これらの特性に当てはまらない家族に対しても体験活動の機会を創出していく必要があると考える。そのためには、教育的意義も重要ではあるが、子供や家族の興味・関心が高い活動や青少年教育施設ならではの体験、家族で非日常の時間を共有することの利点等を伝えていく工夫が求められるだろう。例えば、青少年教育施設のチラシやパンフレットの他、インターネットのローカル検索に家族事業の参加者からの声として、体験を通しての学びや成長があったことや機構<sup>30)</sup>の調査に見られる感染対

策を徹底しながら自然体験ができるといったクチコミを掲載、発信することはアウトリーチの視点に立った場合、有効ではないかと考えられる。

一方で、本研究の限界として、地域の偏りが見られることや体験活動の多寡による意識の違い、参加家族構成といった変数を考慮していないことが挙げられる。よって、引き続き家族事業の参加者を対象に調査を実施するとともに、変数を介した分析を行うことで参加者の特性や期待を精緻に描き出すことを次なる課題としたい。

## 謝辞

本研究は公益財団法人マツダ財団助成金（第35回（2019年度）マツダ財団研究助成—青少年健全育成関係—、代表：庄子佳吾）の助成を受けたものです。調査を実施するにあたり、ご協力いただきました家族事業参加者の皆様、質問紙調査実施にあたり、調査をコーディネートしてくださいました国立青少年教育振興機構の皆様に深謝申し上げます。

## 発表論文

庄子佳吾・及川未希生（2021）：青少年教育施設の家族参加型体験事業における参加者の特性、日本生涯教育学会第42回学会大会発表要旨集録、45

## 参考文献

- 1) 中央教育審議会（2007）「次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）」の中では、体験活動を、「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」と定義している。多様な活動がこの「体験活動」に含まれるが、中央教育審議会（2013）「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」では、体験活動の内容に応じて、次の3つの体験に分類している。第1に、放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校における年中行事などの「生活・文化体験活動」、第2に、登山やキャンプ等の野外活動を指す「自然体験活動」、そして第3に、ボランティア活動や職場体験、インターンシップなどの「社会体験活動」である。
- 2) 内閣府（2018）：平成30年版 子供・若者白書、日経印刷、東京
- 3) 前掲1)
- 4) 「生きる力」とは「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、より良く問題を解決する能力」「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力」とされている（文部省編（1996）：21世紀を展望した我が国の教育の在り方について・中央教育審議会第1次答申、ぎょうせい、東京、20-21）。
- 5) 文部科学省（2018）：第3期教育振興基本計画、[https://www.mext.go.jp/content/1406127\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1406127_002.pdf)、2022年2月25日参照
- 6) 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2021）：青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）報告書
- 7) 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2018）：子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究報告書

- 8) 福満博隆・山本清洋（2001）：野外教育施設主催のファミリーキャンプにおける参加行動に関する研究、鹿児島大学教育学部研究紀要、鹿児島大学、52、141-153
- 9) 庄子佳吾（2017）：青少年教育施設における家庭教育支援の可能性に関する研究—国立花山青少年自然の家における実践を例に—、日本野外教育学会第20回記念大会プログラム・研究発表抄録集、30-31
- 10) 庄子佳吾（2018）：サードプレイスとしての青少年教育施設の役割に関する研究—国立花山青少年自然の家における事例をもとに—プログラム・研究発表抄録集、38-39
- 11) 張本文昭（2001）：自然体験に対する保護者の意識、日本野外教育学会第4回大会プログラム・研究発表抄録集、22-23
- 12) 「早寝早起き朝ごはん」全国協議会（2021）：「早寝早起き朝ごはん」の効果に関する調査研究報告書
- 13) 前掲6)
- 14) 樋口耕一（2014）：社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—、ナカニシヤ出版、京都
- 15) 形態素とは、言葉が意味を持つまとまりの単語の最小単位である。よって、形態素解析とは、言葉を意味のある最小単位に分けて、名詞、動詞、形容詞、副詞、助動詞の品詞を区別する分析のことである。
- 16) KWICは、「Keyword in context」の略であり、コンコーダンス（concordance）は「用語索引」のことである。よって、KWICコンコーダンスとは、特定の語を前後の文脈を併せて表示する索引機能のことである。
- 17) Jaccard係数とは、語と語の共起関係の強さを表示する係数である。類似性測定を行うものであり、0から1までの間をとる。関連性が強いものほど1に近似する（0.1：関連がある。0.2：強い関連がある。0.3：とても関連がある。
- 18) 前掲14)、160
- 19) 前掲6)、103-104
- 20) Bristol, J. (1990) : Enhanced explanations of word of mouth communications: The power of relations. *Research in Consumer Behavior*, 4, 51-83
- 21) Rosen, E. (2002) : クチコミはこうしてつくられる—おもしろさが伝染するバズ・マーケティング—（濱岡豊訳）、日本経済新聞出版社、東京
- 22) 古川柳蔵（2014）：暮らし方を見直す—なぜ利便性追求により心の豊かさが失われてしまうのか—、PEN (Public Engagement with Nanobased Emerging Technologies)、産業技術総合研究所、5(5)、22-24
- 23) 国立成育医療研究センター（2021）：コロナ×こどもアンケート 第5回調査 報告書、[https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19\\_kodomoreport/CxC5\\_repo\\_20210525.pdf](https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomoreport/CxC5_repo_20210525.pdf)、2022年2月25日参照
- 24) 文部科学省（2019）：平成30年度子供の学習費調査、[https://www.mext.go.jp/content/20191212-mxt\\_chousa01-000003123\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20191212-mxt_chousa01-000003123_01.pdf)、2022年2月25日参照
- 25) 厚生労働省（2020）：2019年 国民生活基礎調査、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/14.pdf>、2022年2月25日参照
- 26) 前掲6)、103-105
- 27) 河合雅雄（1990）：子どもと自然、岩波書店、東京
- 28) 瀧靖之（2018）：脳科学者が教える!子どもを賢く育てるヒント「アウトドア育脳」のすすめ、山と溪谷社、東京
- 29) 宮崎良之（2018）：Shinrin-Yoku(森林浴) 一心と体を癒す自然セラピー、創元社、大阪
- 30) 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2021）：新型コロナ

新型コロナウイルス感染症流行下における青少年教育施設の運営に関する現状調査(第2回)、  
<https://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/152/File/00.zentai.pdf>、2022年2月25日参照